子どもたちに郷土の童話を
大井 冷光

1885（明治 18）年 11 月7日―1921（大正 10）年3月5日

- 記者として立山を探検
- 全国で自作童話を語る
- 佐伯有頼像建立を計画

作文が得意な小学生

冷光の本名は信勝といいます。上新川郡三郷村（現富山市）の農家の一人息子でした。生まれる前に父が、10歳のときに母が亡くなったため、信勝は親戚の家で育てられました。祖母や母から聞かされたおとぎ話に興味を示し、本を読むのが好きで、国語が得意でした。

全国で童話を語る

地元新聞社の記者となり、立山の山岳取材などで活躍しました。童話作家になる夢をもち、「長者屋敷」「佐伯有頼」など富山の伝説を基にした童話を創作しました。

1911（明治44）年、童話づくりに力を入れるため上京し、幼稚園に勤めながら童話の研究を続け、子ども向け雑誌の記者をしたり、ヨーロッパの童話を勉強したりしました。そして、自作の童話を子どもたちに話して聞かせるため、全国を旅行して回りました。1915（大正4）年には、富山市や上新川郡の小学校でも童話を語り、多くの子どもたちに感動を与えました。

冷光は故郷の子どもたちに立山開山伝説の主人公「佐伯有頼」の活躍を心の拠りどころにしてほしいと考え、故郷に有頼（→74ページ）の銅像を建てる計画を進めました。

夢や志をかなえたポイント！

- 本をたくさん読む
- 郷土に伝わっているものを大切にする
- 自分の作ったものを多くの人に知ってもらう

富山に伝わる話を題材に、冷光はたくさんの著書を発表しました。（富山県立図書館冷光文庫蔵）

豆知識 呉羽山にある「佐伯有頼少年像」は、冷光の願いを引き継いだ人たちが立山開山 1300 年を記念して建てたものです。